

見えてきた自分の絵

画家 永田 和之さん(35)＝熊本市

ことしの白日会展で、一般・会友の最高賞に当たる白日賞を受けた。300点余りの絵画の中から賞に選ばれたのは、わずか3点。大学在学中に画家になろうと決めたが、模索を続けてきた。「やっと自分の絵が見えてきた気がする」。穏やかな表情に笑顔をのぞかせた。

出身は鹿児島県出水市。ゴッホの絵が好きで、崇城大芸術学部に進み、洋画を学んだ。卒業制作で描いた具象の自画像が白日会展で初入選。これで勢いづくと思いきや、うまく描けなくなった。「描きたいものが見つからない」

さまざまな表現を試した。両手

を見つめる裸の男を漫画風に描いたかと思えば、ピカソを思わせる奇抜な筆致で種をまく人物を描いたことも。「なまけぐせ」もあり、絵が一貫しない時期が7、8年続いたという。

自分に活を入れるように、5、6年前から白日会展への出品を再開。オレンジや黄色など暖かみのある色を使って、ぼかしたようなタッチで心象風景を表現するようになった。白日賞の作品は、実家

の自室がモチーフ。懐かしさや落ち着き、どこか寂しさも感じさせる。審査員には「絵に説得力がある」と評価されたという。

普段はデッサンを教えたり、絵のモデルになったり、絵に関係のないアルバイトをしたり。食べるだけの金を稼いで、絵を描いている。「画家としてのスタートラインに立てたのかな。絵画でしかできない表現をしたい」

(中原功一朗)



白日賞を受賞した作品(右)と永田和之さん＝崇城大ギャラリー